



TITLE:

中國中世における印度的なもの

AUTHOR(S):

宮川

---

CITATION:

宮川. 中國中世における印度的なもの. 東洋史研究 1947, 10(1): 35-35

ISSUE DATE:

1947-12-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145851>

RIGHT:

は軍人が民家の雞を徴發する烈しさを示してゐる。

- ② 古くは魯季氏がコウ氏と雞を闘はせ季はその頭に介せ  
著けコウは金距を用ひて勝つたことあり。(呂氏春秋察  
微) 史記一〇一袁アウ傳に彼が郷里で闘雞走狗を好んだ  
こと、後漢書六四・梁冀傳に、彼が臂鷹・走狗・驅馬・  
闘雞を好み、兔苑を造り兔を飼つたこと、漢書六二に昌  
邑王が濟陽市で長鳴雞を得たこと等がある。弋獵狗馬を  
好まない劉安などは道教趣味にひたり鍊金術などに凝る  
わけになる。

- ③ 樓祖詒氏「中國郵驛發達史」等參照。

- ④ 増井經夫氏「支那技術史に於ける水力問題」(東亞問  
題十) 同氏「支那の水車」(加藤博士還暦紀念東洋史集  
説) 魏志二四・韓暨傳・蜀志八・許靖傳(以馬磨自給)

- ⑤ 後漢書五三竇固傳。同五一・耿純傳。同四六・寇恂  
傳。(彼は馬二千匹を有する上谷の豪族である)

- ⑥ 岑封(同四七)が蜀を討つ時は歩兵六萬に對し騎五千  
足であつた。三國吳になると一部隊の指揮官は兵二千騎  
五十といふのが定制であつた。(吳志八程普傳等)

- ⑦ 後漢書四七・吳漢傳。同四九・耿弇傳。同一、光武帝  
紀等に突騎の活躍が見える。

## 中國中世における印度的なもの

宋書及南史袁粲傳に彼が塞門であるため貴族社會に  
冷遇されたのを怒り、狂泉國のたとへを引き世相をふ  
らししことが記される。「ある國に狂泉あり國人は  
その水を飲み皆發狂し、井水を使用し得たため眞人間  
であつた國王を却つて狂へりとなし王の病を治すべく荒  
療治をしたので苦しさにたへず、王も亦狂泉を飲み發  
狂し君臣共に狂ひ欲然としてくらした」といふが我も  
近頃狂ひ水を飲みたくなつたと述べたことある。説話  
の出典はまだ檢出しえないが印度的なにほひかする。  
搜神記中の印度系説話は既に注意されてゐるが、私の  
讀んだ中では隋書李敏傳の彼が公主に尙する記事には  
自選式を思はせるものあり、西陽雜俎には村正の妻の  
屍に起尸鬼がついた怪話がある。かかる印度説話や風  
俗の紹介に佛教流傳に伴ふものであらうが、それを受  
け容れた中國社會に印度的なものが生じてゐたことを  
注意しよう。六朝身分制の嚴重さは殆んどカースト的  
なものがあり、カースト制否定の佛教を歡迎し進んで  
學んだのは塞門であることを考へたら、中國中世の研  
究には更に東洋史的な廣い視野が必要になると思ふ。